



Title	日本の現代青年における自己の仮面性に関する検討：「キャラ」を介した友人関係による不適應過程に着目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	村井, 史香
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15165号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/87123">http://hdl.handle.net/2115/87123</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	MURAI_Fumika_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：村井 史香

### 学位論文題名

#### 日本の現代青年における自己の仮面性に関する検討 —「キャラ」を介した友人関係による不適応過程に着目して—

本論文は、現代青年の友人関係の中で使用される「キャラ」という仕組みを検討することを通して、多元的自己における「仮面の複数化」について、議論するものである。具体的には、小学生～大学生という幅広い年齢層を対象に、「キャラ」に関する基礎的知見を蓄積し、友人関係において「キャラ」が利用される背景要因、及びその不適応過程を検討した。そして、多元的自己研究に「キャラ」を位置付け、先行研究において否定的に捉えられてきた、「仮面の複数化」とされる者の適応の在り方について捉え直すことを試みた。

本論文は、序章、第1章（文献レビュー）、第2章（本研究の目的）、第3～7章（量的・質的データに基づく検討）、第8章（総合考察）から成る。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、「キャラ」という仕組みを通して、場面に応じて、様々な自己を演じる青年の適応について捉え直すべく、多元的自己研究をレビューした上で、「キャラ」研究の進め方について提案を行った。具体的には、多元的自己の類型のうち、「仮面の複数化」を検討する必要性を述べ、そのために「キャラ」に着目することを提案した。そして、「キャラ」研究をレビューし、周囲から付与された「キャラ」を中心に検討されてきたことや、青年が友人関係に適応するために「キャラ」を利用するという、能動的な側面が見落とされていることなどを課題として述べた。これを踏まえ、今後は、当人が自覚的に有する「キャラ」（自認する「キャラ」）を対象に、「キャラ」を介した友人関係の背景や、その不適応的な側面を検討することの意義について議論した。

第2章では、先行研究の課題として、①「キャラ」研究が少なく、「キャラ」が心理的不適応を生じさせる過程が不明なこと、②多元的自己研究における「キャラ」の位置づけが不明なこと、③多元的自己研究において、「仮面の複数化」に相当する者の適応・不適応過程が未検討であることを挙げた。続いて、これらの課題に対応する、本研究の3つの目的と、本研究の全体的な目的である、思春期・青年期の友人関係において、「キャラ」という適応戦略が心理的不適応をもたらすメカニズムを明らかにし、実践への示唆を得るという目的を提示した。

第3章では、小学生～大学生における「キャラ」の実態と、その発達の変化を検討した。研究2-1～2-4から、「キャラ」は現代の児童生徒にとって広く知られ、経験されていることを明らかにした。また、発達とともに「キャラ」に対する認識は進む一方、「キャラ」を演

じるストレスは、学校段階による違いがみられないことを示した(研究 2-5)。同時に、自分に「キャラ」がある者は、ない者よりも、「キャラ」のメリットを強く認識していた。以上の結果から、児童・青年自身が、「キャラ」のメリットを認識し、友人関係の中で利用するという能動的側面も示唆された。

第4章では、研究 2-5 のデータセットを用いて、学校段階によって、「キャラ」があることのメリット・デメリット認知と、「キャラ」を演じることのストレスとの関連に違いがみられるかどうかを検討した(研究 3)。その結果、中学生、高校生では、「キャラ」があることのメリット認知が高い場合、デメリット認知と「キャラ」を演じるストレスとの関連は相対的に小さくなる一方、小学生では、メリット認知によって両者の関連は有意に調整されないことが示された。つまり、発達とともに「キャラ」への理解が進み、そのデメリットを認識しても、メリットを強く感じる場合は、「キャラ」を演じるストレスにはつながらないことが示唆された。

第5章では、「キャラ」を介した友人関係の背景要因について検討した(研究 4-1, 4-2)。研究 4-1 では、承認欲求と評価懸念、「キャラ」に沿った行動、「キャラ」の受容との関連に着目し、中学生と大学生を対象とした調査から検討した。その結果、学校段階によらず、賞賛獲得欲求だけがキャラ行動と正の関連を示し、賞賛獲得欲求に基づくキャラ行動は、キャラの積極的受容を促進することが示された。一方、評価懸念はキャラの積極的受容には負の関連を示し、キャラへの拒否には正の関連を示した。研究 4-2 では、セルフ・モニタリング、「キャラ」に沿った行動、「キャラ」の受容との関連に着目した。その結果、学校段階によらず、自己呈示変容能力はキャラ行動を促進し、キャラの積極的受容につながる一方、他者の表出行動への感受性は、キャラ行動、キャラの受け止め方とは関連がないことが示された。すなわち、「キャラ」には集団適応に向けた積極的動機に基づいて、利用される側面もあることが示された。

第6章では、友人関係において「キャラ」を演じることの不適応的な側面に焦点を当て、「キャラ」を演じるストレスを促進する要因を検討した(研究 5-1, 5-2)。研究 5-1 では、「キャラ」を演じることのストレスの内容について、大学生を対象に検討した。その結果、「キャラ」が持つデメリットや、友人との関係における苦しさに加えて、「キャラ」と本当の自分との関係が問題となることが明らかとなった。研究 5-2 では、「キャラ」と自己概念との差異、居場所感、「キャラ」を演じるストレスとの関連について、大学生対象の調査から検討した。その結果、「キャラ」と自己概念との差異が、本来感への負の関連を媒介して、「キャラ」を演じるストレスに正の関連を示すことが明らかとなった。すなわち、友人関係における「キャラ」と自己概念とがかけ離れているほど、本来感が低下し、「キャラ」を演じるストレスを促進する可能性が示唆された。

第7章では、「キャラ」を有する青年自身の体験過程に焦点を当て、大学生の友人関係の中で「キャラ」が決定し、維持される過程を明らかにすることを通して、「キャラ」による適応が、経過とともに不適応を生じさせる過程を検討した(研究 6)。面接調査の結果から、

「キャラ」の決定過程には、本人が、集団適応を模索する中で生じるという能動的な側面もある一方、「キャラ」の維持過程では、周囲の期待に応え続けることに苦痛を感じたり、「キャラ」と「本当の自分」との差異が、本人に違和感を生じさせたりするなど、不適応的な影響もあることが示された。このことから、研究2～5から導かれた、“「キャラ」を介した友人関係は、適応的な動機に基づくものであるが、その過程の中で不適応的となっていくというプロセス”が、青年の語りからも確認された。

第8章では、上記の研究結果をまとめ、これまでの研究に対する意義を議論した。具体的には、①実証データに基づき、小学生～大学生における「キャラ」の実態と発達的变化を示したこと、②友人関係に適応するために「キャラ」を利用するという積極的な側面を明らかにしたこと、③一方で、「キャラ」を利用する中で、自己との関係の中で不適応が生じるというように、適応的であるかに思えた行動が、不適応を生じさせるプロセスがみられることを議論した。また、多元的自己研究に対しては、「キャラ」研究の知見から、状況に応じた自己を持ちながらもそれを「仮」として意識する場合は、その背後にある自己のあり方を模索している可能性を示唆した。最後に、本研究の知見から得られる臨床実践への示唆と本研究の限界点および展望を議論した。